

負傷者收容所

その日、

そこは陸軍被服廠の倉庫。古い格子窓がけのうす暗いコンクリートの床だった。その上に軍用毛布を敷き、進けて来たものたちか、向き／＼に横はつていた。壁が木の板や、太い柱の陰に桶や馬穴が汚物を溜め、そこらに糞便とかがしていた。

骨身を刺す異臭の中で、足のふみ場もさく／＼にこぼれかたいてい、大抵疎南家屋の跡片づけに出ている。女学校の下級生が、左か、頭か、全身へかけての火傷や、凝血、塗薬、繻帯などのために汚穢な変貌をして、老妪の群のように見える。

つ助けて、お父ちゃんをすけて

つ水、水、みみ、くわ、の？あ、うれし

つうれしいわ

つ五十番、これか五十番よ！

味三吉 ⑤

足のとこの死んだののけて

声はたかく細くとめどもなく、すでに頭を

犯すぬ右の<sup>も</sup>あつて、なかははもう動かぬ屍

体かつたか：取りのける人争もなかつた。

とまどき館をすま搜す人の最重の防空服装

で入つて来たを、そしてあつて似たかおを

ちやもんべの縮目まの<sup>を</sup>いって廻つた。それを

知ると少女たちの声はひとしきり必死に水と

助けを求めた。

「おがさんミツ！ミツくんであつて！」

髪のない、片目のりまつて全身むくみまつ

右おすめか、柱の陰から半身を起し、へしや

げに水筒をさしあげ、いっまでもあまうめお

にくり返していた。

しかし火傷に水はいけぬときかされてい

おと友は決してそれに取り合はなかつたので

多くの少女は叫びつかれうらめしげに声をあ

とした。

おとろへては、あてもなく高まる狂声をこ

めて、灯のない倉庫はそのまゝ、夜の闇にのま

れといつた。

二日め、

おれかのけを、床の群は半ばに減つてい

た。きのいの叫び声はなく、ときこき憑かれ

たように暮まじ悲鳴はあ、か右意味のわかろ

ぬものであつた。

枕もとの一椀の粥か蠅のたまり場となつて

、ところどころに娘をみつけた。親しい人

んで何かを飲ましていた。飽くしついで、娘の眼

であつた。

飛行機に似た爆音かすこゝみちがヨツと身

をよぶつて逃げようとした。屍体と思つてい

たものも動いた。

そして腕と脚が重つても、もう床面をこ

か出まなかつた。

三日め、

白鳥町の、ようちやん、とがけ判る屍体の

横に河内さんかいた。細い眼で下かき見上げ



うこをもつて来て、ロイヤルの灯であたゝめ  
てうませよだけ。

足のふみ場がなかつた倉庫はがらんとして  
来て、あちの陽、こちの柱がかげにひら

べつなく、或はゴムのようになお上つてこ

るおのり人々、ニ、三、のりみとりと加<sup>暗い</sup>蠅をよ

い、うごめいていぬ。そして、とアツ

ツ島をとり返し、といひ噂がたえらる。

高窓から陽が、しみうつた工二クリ

トウ床を移動する、早くから夕園がしゆい

、ロイヤルの灯をたよりに階段をきつてゆく

人々を床にこころがた、面のような<sup>顔</sup>が

送つていた。

六日め

向うの柱の陰で金文の揃帯がう眠をけ出し

て、そのかたに、た若い工員がほよと君か

代をうたう。

7 敵のB=十九か何だ、ゆれにせど靴、はや

てかある。敵はつけ上げていよんだ。

みんな

うかししし、もうかしのしんぼうか  
と強えい、に熱い息を吐く。

しつかりしちてい、眠んちさい、小母さん  
とよんたうすいま、あけりかう、と隣りの油

~~紙で~~身を包んた腰布も小母まがけのひとか

いざり寧ろていう。

「小母さん——おはさんちやろいお母さん

か——おかあさんだ！」

脂汗のじむ報ぐりい顔をかり／＼とか右

おけ、熱に浮く双眼かう泪が二筋、縮帯の下

にちかれこむ。

七日め、

髪の手をやしなげでぬけ落る。ぼろぼろ

と崩れちりのは踵の蛆。こすり身ままる

め、わかて床の上を這つてゆく。

紫のこまかい斑桌の、握る手か、雀り脚の

よう。

古い倉庫のあちろの隅に終日す、り泣く人

影と、此の柱のかけに石のやうに黙つたま、

時々胸を弓なりに喘かせる患者と

異臭、肉塊と

八日め、

かゝんといふにちつ左陸軍被服廠倉庫。

至んか鉄格子の向うに屍臭を<sup>2</sup>か<sup>か</sup>左煙かけ

もあがった。

柱の陰かゝ水筒をふる手かあつて、うす暗

い壁んは芝巻の眼球か、おびえて重なる。

河内さんちも死んだ。